

馬から牛への転換が図られる中、先駆者たちの多くは、  
いまだ確立されない乳牛飼育方式の先行きを案じていた。  
その頃、7人の若い入植者たちが青葉に集結。  
彼らは20代という若さとずばぬけた発想力で数々の偉業を成し遂げていく。

# 戦後の開拓と 七人の入植者たち

青葉実験農場を引き継いだ佐々木忠男さん。現在も酪農業に携わる。7人の内、雄武町に残るのは高橋さんと佐々木さんの2人。佐々木さんの農場内には当時のバンカーサイロが歴史的産物となって残存している。この場所は、当時7人が仮小屋で過ごした思い出の場所でもあった。



## 戦後開拓の幕開け

昭和20年、太平洋戦争が終結した。この戦争は多くの尊い犠牲を伴い、後に生き残る人々の運命をも変えていった。戦後、700万人もの軍隊が解体され、軍人も含めて外地から650万人が引き揚げ、400万人が失業。米の反収が激減する中で、日本は極限の食糧危機の時代を迎えていた。緊急的な対策が必要であると判断した国は、農地改革の一環で「緊急開拓事業」を実施。行く場を失った者たちを帰農させることで、失業対策を図りながら食糧自給化で対応し、食糧増産を狙っていった。敗戦の混乱を緩和する役目を果たしながら、国の施策を背景に、雄武町

でも戦後の開拓が幕を開けていった。  
本格的開拓

本町にも被災帰農者などの受け入れ開拓者が増加。幌内北地区に京都からの集団帰農者が第一陣として入植し、先駆者たちによる本格的な開拓が始まった。昭和23年、帰農者の生産指導などを目的に開拓農業協同組合が発足。不毛に終わった戦前開拓の歴史的背景から、戦後開拓に新しい農業の風を吹き込んでいった。開拓農協は投機的な畑作農業から、広大な土地面積を生かした酪農畜産の安定経営への転換を目指していた。しかし、凶作による飼料不足、

## 青葉実験農場の栄光

昭和36年、雄武町の青葉地区に全国唯一の機械化実験農場が創設された。農林省（現在の農林水産省）が掲げていた既入植者安定営農構想のターゲットに雄武町青葉地区を含む全国5地区がモデル事業に指定され、青葉地区は9年間の営農計画で、酪農経営方針が確立されていった。劣悪な土壌と気象環境を有していた中、いかに酪農を推進していくかが求められた。当時、一戸で飼養される牛

の頭数は多くて5、6頭。青葉実験農場の計画では100頭という巨大な数値が目標に掲げられていた。果敢にも、その実験農場に飛び込んだのが20代の若い\*7人の入植者たちだった。当時、7人の代表者だった高橋幾夫さん（青葉）は「国の指定は重圧だった。この先、どうやっていけばいいの不安で、何日も眠れない日々が続いた」と当時を振り返る。高橋さんを含め7人はいずれも東北の出身者。それぞれ十勝と釧路の拓殖場で酪農実習を経て、雄武町に入植した同志。7人はすぐに意気投合し「拓実会」を結成。「同じ拓殖実習場で相通じるものがあった。身寄りがいない俺たちは結束しかなかった」。昭和35年、拓実会の7人は

\*高橋幾夫、小野寺主税、水間洋右、太田豊、高橋一、佐々木忠男、鈴木弘（敬称略）

協力し合い、土地や家畜、資材を「共有」という従来になかった画期的な発想を取り入れることを決議。そうして、農林省と7人の構想が重なり合い、昭和36年、「開拓地大規模機械化実験農場」が実現した。当時、自分の生活に精いっぱいだったといえる小規模な酪農家が散在する中、共同経営という全く新しい手法が初めてこの地に打ち出された歴史的瞬間だった。また、資材だけでなく、負債も共同化。作業能率向上のため、各戸持ち回りで子どもを預けるという託児方式を採用。「たとえ家内が病気になるたとしても、預けている間に休養できる。当時はそうしなければならなかった」。設備にも革新的な

処方が施された。3カ年計画で、道内唯一のバンカーサイロを導入。サイロとは家畜の飼料を収蔵するいわば倉庫。塔の形やビニールシートなどで密閉されるサイロなどはよく知られるが、ここでは道内初の「納屋式サイロ」が導入されていた。高橋さんは「日本で最初に導入した。画期的だったのは牛を自由にさせて、餌を食べさせることができたこと」とルーズハウジング方式導入の快挙を語った。また、パイプラインミルクが導入されていたが、これの導入も日本初の快挙だった可能性が高い。当時の情報がままならないが、農林水産省作成の平成22年度食料・農業・農村白書と、平成17年版「新たな家

畜改良増殖目標のポイント」によれば、昭和40年代に入り、パイプラインミルクの技術が普及したとある。昭和37年10月に発行された「雄武町の歴史」には、既にパイプラインミルク導入当時の写真掲載があり、このことから当時の実験農場がどれだけの画期的なものだったのか想像がつく。農場の経営は5カ年計画で黒字化に成功し、当初の目標を達成。昭和39年には、北海道知事の町村金五氏も来町。連日、視察訪問に訪れる酪農家や関係者が後を絶たなかったという。7人はまさに先駆者として酪農者たちの灯台の光のような存在となり、営農路線を先導する者として異彩を放っていた。計画も終了

する頃には牛の数も約180頭に及び、軌道に乗り始めていた。しかし、高橋さんは計画終了後、すぐに農場解散を決断。「これからの時代は、この規模なら一人でやる時代が来ると確信した」。高橋さんは予言のようなものを感じたという。それはまさに先駆者だけが感じる事ができた、現在の大規模化経営の予感だったのかもしれない。革命的で偉大な功績を残した青葉実験農場。高度経済成長期で都市部に人口が流れる中、国は入植者たちに補助金を交付し酪農を推進するようになっていった。国策で開拓者増大を図り、酪農者を排出しながら戦後開拓時代は栄光の幕を閉じていくのであった。



## 雄武に来た日は一生忘れない

高橋 幾夫さん（青葉）

水田農家育ちだったが、北海道のより広大な大地を求め、昭和31年に入植。1年間、十勝拓殖場で酪農研究をし、営農設計プランを掲げ来町。「俺の戦いは井戸を掘ることから始まった」。まず手始めに水を確保する必要があったため、スコップとつるはしを使い井戸を構築。入植者たちの補助住宅は建設に約1年を要するので、仮小屋を建築。材料はササと焼けた木。電気はなくランプの生活を送った。仮小屋ができるまでは住む場所がなく、集落の人に頭を下げて宿泊場所を確保した。「畜産を頭に描いて雄武にきたらここは畑作だった。牛は多くて5、6頭。でもそれが当たり前の時代だった」。今のような大規模経営など当時の人には想像もつかなかったはずだ。国の指定を受ける重圧の中、ひたむきに開墾した先駆者。青葉実験農場を振り返り「言葉にならない」と話した。